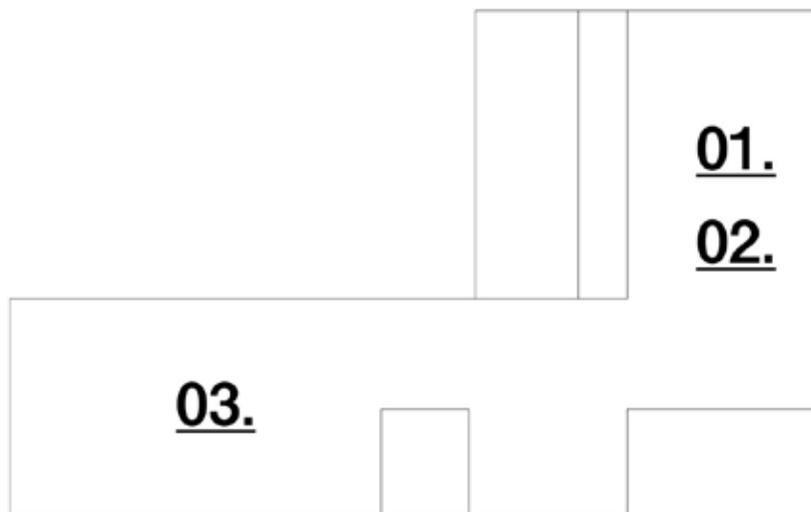


菅沼朋香 / Tomoka Suganuma



01. ニューロマン 都会編

制作年：2017

ニューロマンとは、現代の生活についての疑問を自身のライフスタイルを用いて提案する表現手法である。「ニューロマン 都会編」は、1986年の誕生から2017年までのストーリーを盛り込んだ短編ドラマだ。私は小学1年生でバブル崩壊、社会人1年目にリーマンショックを経験し、生まれてから一度も好景気を経験したことがなかった。ある日、純喫茶を訪れたことをきっかけに日本の高度経済成長期に関心を抱くようになった。今日より明日が良くなると誰もが信じていた時代だからこそ生まれた豊かなデザイ

ンや、現代にはないコミュニケーションのかたちに惹かれた。街を見渡せば、そこかしこに当時から営業しているお店があり、体験してみることもできた。しかし、建物の老朽化や後継者不足による閉店など、当時の面影は日に日に消えゆくばかりだった。私にとって高度経済成長期は幻のような存在であったことから、2013年に「まぼろし屋台」を制作。以降、高度経済成長期に習う大量生産・大量消費に対する問題提起と日本の風土に合う生活の提案をテーマに作品制作を開始する。

02. ニューロマン ニュータウン編 (予告)

制作年：2017

「ニューロマン ニュータウン編」は、高度経済成長期が産んだ新興住宅地〈ニュータウン〉に対する問題提起と提案を行う作品だ。私は愛知県豊田市の五ヶ丘ニュータウンで生まれ育った。駅から遠く、庭付き一戸建てが立ち並ぶベッドタウンである。住宅ばかりで店舗はほとんどない。住民のほとんどが同世代のサラリーマン家族という均質な環境だった。子どもの頃からニュータウンでの生活に不便さと息苦しさを感じ、都会の生活に憧れていた。そのため、就職を期に実家を出て一人暮らしをはじめた。

そんな私が再びニュータウンと関わることになったのは、東京藝術大学の修了制作展でのことだった。修了作品「ニューロマン」の「第三章 移住編」のポスターを建築家で東京藝術大学准教授の藤村龍至氏が見て、埼玉県の鳩山ニュータウンへの移住を勧められたのだ。2017年3月。様々な葛藤のなか、自身のルーツであり高度経済成長期の産物であるニュータウンを題材にした作品を作るため、東京都から埼玉県比企郡鳩山町の鳩山ニュータウンに移住した。こうして「ニューロマン ニュータウン編」が始まった。

ニュー喫茶幻

鳩山ニュータウン内の元空家の自宅の1室を改装したサイケデリックカフェ。〈多様性の開花〉をテーマとする。

鳩山ニュータウンは1970年代に東京都のベッドタウンとして開発された。当時一斉に住宅を購入した人が一斉に高齢者になったこと、共働きの増加で都市に人口が集中したことにより、現在では埼玉県 NO.1 の高齢化率となっている。

「ニュー喫茶幻」では、ベッドタウンとしての役目を終えたニュータウンが自立して賑わいのある町になるために、町の中で面白い事業を行う人を増やすこと(=多様性の開花)を目指す。

2018年に飲食店営業許可を取得。毎週火曜日の朝にモーニング営業を行う。店内には、町の中で自らが面白い事業を行う人を応援するための〈リアルファンディングBOX〉があり、企画書を読んで応援したいプロジェクトを見つけたら、募金箱にお金を入れることができる。プロジェクトの進捗はyoutube等で発信している。

空家スイーツ

鳩山ニュータウンの空き家などの庭に実っている果物を使用したロシアケーキ。〈庭のある生活の豊かさ〉をコンセプトに、焼き菓子作家の山本蓮理氏と共同で開発し2020年に商品化した。「ニュー喫茶幻」を拠点としたアートプロジェクトの1つ。

鳩山ニュータウンの特徴として、庭付き一戸建てが立ち並んでいることが上げられる。高度経済成長期に夢のマイホームとして郊外に開発されたが、若者の都心回帰に伴い空き家が急増した。それらを〈負の遺産〉と称されることも少なくないが、私はなぜか違和感を感じていた。確かに鳩山ニュータウンは都心に通勤するには遠い。しかし、季節ごとの植栽がされた庭が豊かなものであることに変わらない。本当の負の遺産は、時代の変化により豊かさを忘れて

しまった私たちの心の中にあるのではないか。

「空家スイーツ」では、空き家等の庭に実って収穫されない果物を家主の許可を得て収穫。季節ごとの果物を、添加物を使わずに素材の味を活かしたロシアケーキとして商品化した。世界初?!のニュータウン土産として〈庭のある生活の豊かさ〉を伝えるとともに、空き家の持ち主に果実提供のコンタクトを取ることで更なる空き家活用を目指す。

03. ニュー・ウェディング

制作年：2018-2021

「ニュー・ウェディング」は新しい結婚式の形を提案するアートプロジェクトである。

2017年4月29日(昭和の日)。私は31歳で入籍した。今まで何度も友人の結婚式に出席してきたが、自分の挙式となるとイメージが湧いてこなかった。一般的に結婚式といえば、教会式、神前式、人前式の3種類があるのだが、日常生活の中で宗教を意識することがないので、急に選択するとなると困ってしまった。宗教といえば、私の実家は神道、夫の実家は仏教のお葬式をしている。それを踏まえると神前式、または仏前式ということになるのだろうか。しかし、突然に神様・仏様の前で永遠の愛を誓うのは違和感を感じてしまう。勿論、キリスト教でもないのにチャペルで挙式というのは論外だった。人前式という選択肢も考えたが、それ以前に〈そもそも結婚式とは何なのか〉という疑問が湧いてきた。

調べてみると日本における神前式の歴史は思ったよりも浅く、明治時代中期に始まったものだった。キリスト教の結婚式は唯一神との契約という意味があるが、八百万の神がいるとする多神教の日本では神前

式という概念そのものがなかった。しかし、開国によって欧米文化に習うことになり、キリスト教の結婚式や仏教のご祈祷の内容を参考にして新しく作られたものが現在の神前式である。やがて、高度経済成長期に境に結婚式は産業化していった。その背景には核家族化による住宅事情の変化などが影響していた。時代と共に結婚式が変化する中で、自分は何を大切にしたいのか。神前式が作られる前の婚礼の儀式はどのようなものだったのかに興味を湧いた。もともと日本では〈道具入れ〉〈嫁入り〉〈祝言〉の3つの行事を合わせて婚礼の儀式としていた。〈道具入れ〉は花嫁道具を運び入れること、〈嫁入り〉は花嫁が新郎家に移動すること、そして〈祝言〉は家に親戚縁者をもてなしてのお披露目会だ。この3つを1週間程度かけて執り行っていた。〈道具入れ〉と〈嫁入り〉を現代の生活に取り入れることは難しいが〈祝言〉に近いものであれば実現可能なのではと考えた。

2018年2月10日。「ニュー・ウェディング」を企画した。東京、神奈川、愛知、岐阜から両家の親族一同を熱海に招待して、一泊二日の大旅行会を行った。温泉に入り、浴衣を着て、夜は〈祝言〉を模した宴会場で大いに語り合った。旅行会を選んだ理由は、現代の住宅事情では〈祝言〉のように親戚一同が集まれる部屋がないことと、挙式・披露宴は行わず、新郎新婦と親族同士の交流の時間を最も大切にしたいと考えたからである。これが私の新しい結婚式の表現である。